

2024年2月24日(土)

老球の細道776号

パニックになったのは「どこのドイツだ」②

・・・ユーロバスケットボールツアー紀行〈Ⅱ〉・・・

会津バスケットボール協会 室井 富仁

それにしても長い旅だった。12月26日(土)12:30に成田を飛び立った。オーストリアの首都ウィーンに着いたのが12時間後。そこから小型機に乗り換えてチェコ首都プラハまで約1時間。そこからバスに乗り換え、国境を越えて約2時間、最終目的地ドイツのケムニッツに到着。現地時間は12月26日夜の9時を過ぎていた。

長い飛行機の旅であるが、疲れを感じさせない楽しみもある。それは機内から見る地上の景色と機内で見ることができる最新の映画。あっという間に1、2時間は過ぎてしまう。そしてもう一つ忘れてならない楽しみは国際色豊かな機内食と航空会社が属する国の最高のビールとワイン、コーヒーが無料でいくらでも飲めること。しかもそれらを座席まで運んでくれるウェイトレス(ウェイターに当たってしまうと残念)は超美人揃いのスッチャーこと客室乗務員(スチュワーデス)。彼女らに英語で注文を質問され、英語で応える(BEER! CAFE!の1単語だけであるが)コミュニケーションの中に至福の時間を感じるのは我々団塊のおじさん世代の特徴だろうか。

こんな楽しい機内でとんでもない試練(失態?)を経験してしまった。高い飛行機代を払いながら、目先の私利私欲で至福の時間を地獄の時間と化したのである。機中でランチタイムとなり至福の時間。機内食とアルコールがサービスされる。私は水を得た魚のように、ボールを得たシューターのようにビールとワインを各々2本飲んだ。実にうまかった。生きていて良かった。食事も済み、ほろ酔いかげんになってきたので仮眠をとることにした。突然目が覚めたら試練が始まった。もちろんしなくても酔い悪夢の試練、オバカ試練である。心拍数が急に上昇した。呼吸も苦しくなり、15年前に経験した心臓の不整脈状態と同じような状態になっていた。飲酒量としては普段と変わらないのにどうしたことだろう。

機内の飲酒は要注意であることをすっかり忘れていた。高度約1万メートルを飛ぶ機内では0.7~0.8気圧に下がる。これは約2千メートルを登山している状況と同じ。気圧が低くなると、機内の酸素量も20%ほど低下する。気圧の影響があり、気圧が低いとアルコールの影響を受けやすくなり、地上より3倍酔いがまわりやすくなると言われる。

水を飲んだり、深呼吸をしたりして何とか自力で心拍数を安静にしようと試みたが2時間経っても変化なし。いよいよもって最後の手段。スチュワーデスに急を申し出て救急処置をお願いした。しかし、処方箋は1本のコーラ(酔い覚ましに良いらしい)と酔いが覚めるまでの睡眠の指示のみ。楽しい機内時間が酔いと格闘と睡眠のみになってしまった。

私達が乗ったウィーン、プラハ経由の飛行機にはかなりの日本人がいた。聞くところによると世界的に有名なウィーンフィルのニューイヤーコンサートを聴くためにやってきたそうである。音楽の世界にもクレイジーな日本人がたくさんいるものである。(続く)